

転んでも、また起き上がって歩こう

23歳で単身バングラデシュに渡り、「発展途上国から世界に通用するブランドを作る」という理念のもと、25歳で株式会社マザーハウスを設立した山口絵理子さん。小学校時代にいじめに遭い不登校を経験したり、バングラデシュでも信頼していた工場長に裏切られたりとタフな経験しながらも、ブレずに自分を持ち続け、発展途上国と先進国との壁を壊そうと挑んでいる山口さんの人間的な魅力を紹介します。



山口 絵理子
(やまぐち・えりこ)

株式会社マザーハウス代表取締役兼デザイナー。1981年埼玉県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部に入學。大学4年時、ワシントンの米州開発銀行でインターン経験。そこでの途上国支援に矛盾を感じ、バングラデシュに渡る。その後、バングラデシュBRAC大学院開発学部修士課程に入學。2006年に株式会社マザーハウスを設立。シュート(麻)を使ったバッグ等をバングラデシュ、ネパールの自前工場生産し、輸入販売している。著書に『裸でも生きる—25歳女性起業家の号泣戦記』(講談社)。

「バングラデシュに渡られたきっかけは、どのようなことだったのですか。」

大学時代、米州開発銀行でインターンをしました。そこで働く人たちの中には途上国に行ったこともない人たちがたくさんいて、お金をばらまくだけと感心しました。私は、貧しいという現実をこの目で見なければ何も始まらないと思い、インターネットで「アジア 最貧国」と検索し、その1週間後にはバングラデシュに渡りました。

「検索して、行こうと考え、実際に行動に移してしまうのは、なかなかできることではないですよね。」

思いついたらすぐに行動しようと言われることはとても多いです。最初にバングラデシュに行った頃は、日本人が歩いているだけでも珍しく、まして女性が一人でも珍しくはとても危険でした。でも、自分の中ではすごく悩み、考え、勇気を振り絞ってバングラデシュに行きました。

「バングラデシュと日本のビジネス

はかなり違うのではないですか。」

同じことを探そうが難しいです。かつて、工場に行ってみるとぬけの殻になっていた経験があります。ミンも、素材も、デザイン画も、そして工場のみなもない。裏切られたショックで、正直もうやめた方が楽かなと思うこともありました。でも、自分でさえ、食べるものがなければ同じような行動をしようかもしれないと思いました。このショックな出来事があったら、現地の人や現地をありのままに受け入れられるようになりました。価値観はそれぞれ違い、普通だと思えることは普通ではないんだなあと感じています。

「信じた気持ちに後押しされるように、彼らに対して恥ずかしくない意思決定をしてきました。」

「自分を信じる強さをお持ちなのですね。」

信じるというすごいことなのですが、悪い言葉でいうと自分勝手なのかもしれません。人から見ればうれしい言葉や悪い言葉、他人の評価は自分には響きません。ファッション業界にいると隣のお店がどうかか気にしていたらきりがありません。

「ご自身の軸がブレないのですね。立ち止まったり、落ち込んだりはしないのですか。」

自分らしくないと思う行動をしたとき、少し変な判断をしてしまったときなどは、自分を自分が好きでいられるように生きていたいと思っています。自分としては、立ち止まっている時期もたくさんあります。人間には、バイオリズムがあって、ずっと落ち込んでいない人はいないと思います。休めば体力も回復するし、そうすれば、気持ちも自然と楽になるのです。なので、私は、落ち込んだときに無理に高めようとはしません。

「小学校時代にいじめに遭ったようですが、その経験について今はどの

ように考えていますか。」

学校に行けなかった経験がなかったら今の自分はないと確実に言えます。子どもながらに、あの時はとてもつらかったです。この経験がきっかけで、学校のことを考え、社会のことを考えました。つらい経験をバネにできる人は、本当に大きく成長できます。過去につらかった経験があるスタッフもいますが、そういう人はやはりこそぞというときに強いですし、危機をチャンスに変えられます。挫折を知らない人間としての幅は生まれませんよね。

「学校に行けずに悩んでいる人、なんとか今を脱却したいと思っている人へ山口さんからメッセージをお願いします。」

自分が今つらいポジションにいると考えれば考えるほどつらくなると思います。今いるところからガラリと見方を変えてあげるといいと思います。また、子どもたちを支えるのは、やはり親です。私がつらかったときに欲しいと思ったのは、愛されているという事実です。学校では、みんなが自分の事を嫌いだと思っていたので、一人でも自分の味方だと思える人がいると違うと思います。悩んでいる人たちは、決して一人ではないということを感じてほしいですね。



「絶対に自分の意見を押し付けません。食欲に彼らから吸収しようと思っっています。」

「日本人で初めてバングラデシュの大学院に入学されたり、若くして起業されたりする中で、さまざまな困難があったと思います。不安はなかったのですか。」

確かに、初めてのことで不安もありました。でも、2年間バングラデシュの大学院に通い現地で生活をしていく頃に、スラム街で裸

子どもがいたり、ストリートチルドレンがいたり、最低の生活レベルを目の当たりにしてきて、失敗って何だろうと考えました。日本人が失敗したって、高が知れていると思いましたが、むしろ恥ずかしいのは、自分が健康で日本人としてラッキーな境遇で生まれてきて、やりたいことをやらない方がよっぽどかっこ悪いと思えました。

この国は貧しいからといって、貧しいものしか作れないわけではない